

8/18(土) まいど、倫理号です。なほい葉は枝折から転じて、葉とか  
葉内や手引きを意味するとか、納得します。

今週の倫理 1095号

葉内と手引き

2018.8.18~8.24

八月のテーマ

万人幸福の葉



え・城谷俊也

# 大決断の拠り所

**経**

営者は日々多くの決断を迫られます。その積み重ねが事業の成果につながっていきます。

経営上の決断は、数値や事実の蒐集にはじまり、それらの整理、解釈、さらに自他の経験知を加味して行なわれるものでしょう。

ただし、いくらデータを蒐集し、優秀な頭脳集団を抱え、経験豊かな識者を総動員して判断材料を揃えても、最終的な断を下すのはトップをおいて他にありません。その際に問われることは、右にするか左にするかの根本的な価値基準判断基準を当の経営者が持っているかどうかということです。

倫理法人会では、その拠り所、決断の指針として、純粹倫理に基づいた物の見方、考え方を提供しています。この生活法則をまとめた書物こそ『万人幸福の葉』（以下『葉』）に他なりません。

ある社長は、『葉』の六条にある「子は親の心を実演する名優である」という箇所を読んでハッとしました。子を社員、親を社長と置き換えて見たからです。社員はか

りを責めていた態度を改め、自身の生活や言動を改善したところ、はからずも社員との関係が円滑になったのです。

この事例で重要なのは「ハッとした」という点にあります。情報として純粹倫理の内容を受け取っても、自らを行動へと突き動かすような閃きが去来するか否かは、その人の感性によらざるを得ません。実は、純粹倫理の学びで最も重視するのは、この感覚なのです。

ただし、こうした直観も、まずは知的な情報として獲得されなければ、閃きようがありません。講話などで知識として蓄積された純粹倫理の情報は、実践を通して生きる知恵と化し、より精度の高い気づきをもたらすことでしょう。ここに至ってはじめて、生活法則としての純粹倫理は、経営上の決断の拠り所になるのです。

『葉』の著者である丸山敏雄は、この本の発刊式の挨拶で、「十七の標語は口をついて出るように記憶して欲しい」と語り、ここから深い道に入ることができるといった

ことを述べたといえます。読者が先入観を捨て、現状に照らし合わせて、自らの実践と結びつけた読み方をする時、そこに込められた「叡智の扉」は開きます。求めの強さ、心の純度に応じて、その扉の開閉度合いは変わるのです。

「葉」という語は、一説によると「枝折しお」から転じた言葉だといえます。迷いや辛い山道などで、木の枝を折ったり、細く削ったりして、後続の人や帰路の道標としたことから、案内や手引きを意味します。

この小冊子を経営上の指針とするには、まず親しむことです。いつも持ち歩き、折に触れて繕くことを習慣化してみましよう。

または、毎日気に入った箇所を音読することもできます。不思議とその時の自分自身に必要なびつたりのフレーズに気づく（出合う）瞬間があります。それをそのまま実行に移してみるのです。

『葉』を自律的に活用する時、物言わぬ文字が語りかけ、大決断の拠り所となってくれますでしょう。